

『よしの冊子』からみる江戸の読者と黄表紙 —
武士戯作者の引退の背景を探る

Andrea Csendom チェンドム・アンドレア (東京)

Abstract

This paper examines the relationship between the main text of *Ōmu gaeshi bunbu no futamichi* (1789) and other historical materials from the Edo period, such as *Yoshi no sōshi*, focusing on several scenes. Harumachi's *kibyōshi* has been described in previous scholarship as a work that has led to the author's death because of its satirical depiction of the Kansei reforms and Matsudaira Sadanobu. This view, that *kibyōshi* were banned because of their satirical elements, has remained unchanged from the Meiji period to the present. The Edo period, however, had a different view of satire. The shift in evaluation is due to the changing social role of *kibyōshi* during the Meiji period. By re-examining source materials from the perspective of Edo period readers, rather than later generations, we can reveal how *kibyōshi* were read and understood at that time. Through the examples presented in this paper, we make clear that *kibyōshi*'s topicality did not mean more than a theme that began and ended in the same year for Edo readers. Furthermore, this paper aims to explore alternative reasons for the retreat of samurai writers, rather than simply attributing it to the political constraints imposed by the stylistic elements and themes of *kibyōshi*, as has been the prevailing view.

はじめに

本稿は、江戸市中の会話を収録した『よしの冊子』（水野為長著、天明～寛政年間、1781-1801）¹などの同時代の資料を参照しながら、黄表紙作品、主に『鸚鵡返文武二道』（恋川春町作、寛政元年、1789年）本文中のいくつかの場面に焦点を当て、黄表紙がその扱うテーマを選んだ理由、そしてその役割について、さらに同時代の読者の解釈に注目する。『鸚鵡返文武二道』と同様に、当時政治に関わりを持ったいわゆる改革期の黄表紙が、新しい題材を生み出したわけではなく、江戸で流行していた話題を黄表紙に取り入れていたことを、明確にしていく。江戸で既に笑いの対象であった事柄を再解釈し、黄表紙らしく書き換えたことの真の目的、それは武士戯作者（藩士）の視点から、変わってゆく世の中に適応できない旗本（幕臣）を揶揄することにあった。作者の「価値観」を敢えて読み取るとすれば、それは定信政権が作り上げようとする新社会秩序に適応することを評価することであったが、関連黄表紙の焦点はそこではない。ただし本稿の主旨は作者の意図を解明することではなく、読者の理解はどのようなものだったのか、それを作者はどのように工夫して導いたのかを考えることにある。したがって作者の意図も解明しつつ、読者がその意図や作品の内容をどのように理解したのかを、他の情報を元に検討していく。本稿は博士論文の成果の一部を

¹ MORI (ed.) 1981.

抽出したものであり、背景や詳細な史料分析は博士論文で論証済である。²

史料紹介と『よしの冊子』の参照対象史料としての妥当性

本研究では戯作である黄表紙の中でも、政治や政策に影響を受けた社会を茶化した「改革の黄表紙」（1788—1790）に注目する。この黄表紙の題材は旧政権の老中であった田沼意次（1719—1788）の失脚と、新政権で老中となった白河藩藩主の松平定信が主導した寛政改革や当時の政治状況、そしてその社会的受容を反映したものである。

戯作とは武士作者の趣味として、社会的且つ彼らが置かれた立場に対する不満の解消のために18世紀初頭に生まれ、徐々に展開していった第二文学のことである。³当初は武士仲間の内で社会を穿ち、自らの知識を見せつけ、自己表現をするために活用された、癒しの文学であったともされる。時代が下ると江戸町人の人気を得、大衆化、商品化した。その中でも黄表紙は、武士作者が代表した前期戯作の後半（1775—1806）にかけて刊行された、江戸の社会を揶揄する絵入り本のことである。寛政初期は戯作界の転換期であり、町人作者が主流となっていった時期である。

黄表紙の本質を理解するためには戯作の世界観が重要である。江戸の「粋」という理念には、江戸っ子たちにとっての理想的な生活スタイルが含まれており、これを実現できたのは主に「通人」と呼ばれる、吉原などの遊郭で優雅に遊ぶ豪商たちであった。一方江戸に移住した田舎者や、江戸っ子の美意識を理解できない人々は「野暮」と呼ばれ、彼らの言動を黄表紙の主題として扱いそれを揶揄する、といったことが行われていた。即ち黄表紙の制作目的は、江戸時代の美意識に即した粋な生活スタイルを描きながら、野暮な言動を穿つことにあった。

黄表紙の読者については従来、主に江戸在住の男性とされてきた。しかしながら筆者が博士論文で展開した読書記録の調査により、武士が黄表紙を田舎に土産物として送っており、その内容を深く読み解いた武士仲間もまた読者の一部であったことが判明した。また女性や子供も、読者の範疇に含まれていたことが明らかになった。読者に関しては棚橋正博氏が三層を区別している。まず1番目は、隠された意味を読み取れない「表層を読む読者」、そして2番目は、当代期のどこの誰に見立てたかを読み取れる「訳知りの読者」、さらに3番目は、作者同士の遊びや作品のさらなる深みを読み取れる「同心円で作者と重なる読者」。⁴本稿の研究目的は2番目の「訳知りの読者」が黄表紙をどのように理解していたかについて探究することにある。黄表紙の特徴の一つである見立てを活用して、物語中においての古代の出来事や人物の描写のされ方について理解できるかどうかは1番目と2番目の読者の主な相違点である。つまり作者が古代の物語を当時の出来事や人物にどのように関連付けたかを解釈することが「粋」であり、それが複数の意味や層を作り上げることを可能にしている。これを解読できた読者こそが「通」であり、この作者と読者との遊びこそが黄表紙の本来のエッセンスであると言える。

『鸚鵡返文武二道』は恋川春町の黄表紙で、浮世絵でも有名な蔦屋重三郎の書肆で1789年（寛政元年）に出版された。瀬川富三郎編『諸家人名／江戸方角分』⁵によれば、作者春町（1744—1789）は小石川町に住んでいる「不埒」という名前前で、狂歌師、画家、戯作者でもあった。その下

² NAKAZAWA-CSENDOM 2020 を参照。

³ NAKAMURA 1982.

⁴ TANAHASHI 2012: 304.

⁵ 本研究に直接的に関連はしないが、この史料には興味深い点がある。それは寛政・享和・文化年間に活躍した知識人たちの名簿で、約千人が登録されていることである。ここでいう「諸家」とは、学問や芸術などの分野で活躍した文化人を指し、学者や詩人、画家、書家、本歌師、連歌師、諧謔師、狂歌師、戯作者、浮世絵師、篆刻家、古人などが含まれている。それぞれの名前が記載され、特別な符号が付けられている。現存する版本には大田南畝の記載があり、文政元年（1818年）の日付が刻まれている。

に「酒上」、「戀川春早」という芸名も記載されている。備考に「平松安房公藩倉橋壽平」とある。即ち倉橋壽平の本業は藩士であり、趣味としてはまず狂歌師、つぎに画家、そして最後に戯作者として知られている人物であった。藩士「倉橋格」兼戯作者「恋川春町」の素性、そして彼の作品の本質を理解するのに大変重要な順序である。ここで強調したいのは、改革の黄表紙を執筆した作家で身分が明らかな武士の黄表紙作者は、藩士、あるいは引退また町人化した幕臣だったことである。即ちこの時期に幕府では役職に付けない人物で、教養が高い江戸在住の武士が狂歌を詠み、黄表紙も執筆していたということが、このジャンルの性質を物語っている。この事実は黄表紙の内容にも作者の意図にも影響していたので、この観点から本稿を進めていきたい。

『鸚鵡返文武二道』は 1789 年（寛政元年）に出版されたため、その内容は前年の 1788 年（天明 8 年）の出来事に関するものであると理解する必要がある。黄表紙は速報性があり、江戸中で話題になっているテーマを記録、再解釈していることが特徴である。すなわち人々が興味を持っている話題を作者が巧みに再解釈し、その腕前で鮮やかに描写することが重要である。本稿では作品のあらすじや「訳知りの読者」の解釈については省略し、付録の「黄表紙の原本」に記載することとする。

速報性という性質では『よしの冊子』が黄表紙と非常に似ているが、史料の性格が異なるため、並行して利用することによって、より正確な史実が読み取れると考えられる。『よしの冊子』は寛政改革を率いた老中首座である松平定信の側近、水野為長（1751–1824）が作成した風聞書きで、主に幕府の重要人物に関する話題を収録している。風聞なのでその史実性に関しては多くの議論があるが、以下に論じるように近年では正当な史料として認められつつある。『よしの冊子』は膨大な史料であるが、松平定信とその周辺の重要人物も当該期の読者としてこの史料を目にしていたであろう。また後世にとっては、寛政期を忠実に描写している記録としても評価できる。

『よしの冊子』の分析を通して、黄表紙が取り上げる話題がその出版の前後に広く江戸っ子の間で面白がられていたこと、またそれが黄表紙においては政治を風刺する目的ではなく他の目的で利用されていたことを本稿で紹介する。『よしの冊子』は古くから黄表紙研究の史料として扱われているが、従来の研究では寛政改革期の黄表紙の取り締まりに関する五つほどの同じ内容の記述が繰り返し注目されてきた。その理由の一つは、従来『よしの冊子』が信頼できる史料として見なされていなかったことが挙げられる。ところで橋本佐保氏の分析によれば、1787 年（天明 7 年）から 1793 年（寛政五年）の間に記録された 5252 点の記述の中で、1788 年（天明 8 年）に 1530 点、1789 年（寛政元年）に 1203 点と記述の大半が集中しており、大名から旗本までの役人が注目されているのだが、老中松平定信に関する記述はおよそ 100 件と全体に比べて少数であることが分かる。⁶ 即ち人々が注目している時期は、まさに改革関連の黄表紙も隆盛した 1788 年（天明 8 年）から 1789 年（寛政元年）であり、注目される人物は役人であったことが明確である。さらに橋本氏によれば、定信が『よしの冊子』を参考にしていただけではなく、記述を批評していたことも窺える。⁷

従来の研究では、資料の正確性に欠けることから『よしの冊子』は史的研究には不向きであるという意見に対して、高橋章則氏は定信が政策の決定の際に『よしの冊子』を参考にしたと推測し、よって定信の政治的な意図の理解へ接近するためには有意義な史料である、と指摘している。⁸ 筆者も橋本氏や高橋氏と同様に、『よしの冊子』を従来の利用方法ではなく、本文の分析と黄表紙との関連性を取り上げることを通して 3 点の論証に利用できると考えている。1 点目は、武士戯作

⁶ HASHIMOTO 2010: 138.

⁷ HASHIMOTO 2010: 166. 定信が自ら記述を批評した「虚説」という書入れが見受けられることから。

⁸ TAKAHASHI 1994: 102–103.

者の目標は定信の批判ではなく⁹逆にその政策への賛同であったこと、2点目はすでに江戸中の笑いの対象だった風聞を再解釈したのみの題材で作者のオリジナルの意見ではなかったこと、3点目は別のジャンル（狂歌、落し噺）で江戸っ子がすでに穿っていたことがら¹⁰を揶揄したことである。本稿で注目する『よしの冊子』の引用文は、従来の研究では利用されていなかった、直接黄表紙について記述していない項目であり、以下の比較検討によってその関連性を明確にしていく。

先行研究の見解と一史料の比較検討

研究会における明治期からの通説では、黄表紙は風刺¹¹を用いて社会を揶揄する俗な文学と評価されている。通説では寛政改革を揶揄風刺した武士戯作者が批判され、その結果戯作から引退させられたとされている。¹² 筆者の博士論文では、寛政改革に関連する文化期から昭和初期までの黄表紙についての一次資料や、黄表紙原本にある読書記録¹³を分析した。その結果、江戸時代で人気のあった話題が寛政後期には人気を失っていった傾向が明らかになった。文化期頃からは黄表紙の政治に対する「風刺的」な側面は取り上げられなくなり、江戸後期にはほぼ忘れられ「滑稽」という性質で解釈されていく。さらに明治初期の評論家や浮世絵愛好家の記録には、西洋の思想の影響を受けたものが見受けられ、彼らの興味関心は作品の政治的な「風刺的」「批判的」な側面に向けられている。このような明治期に発生した見解は現代の研究のスタンスにまで影響を与えている。¹⁴ 恋川春町をはじめとする黄表紙作者の引退について、昭和初期には従来の見解に異を唱える論も存在した。これらの論では、寛政改革を取り上げた黄表紙の内容が問題視されたわけではなく、恋川春町らの引退の理由は他にあったと考えられていた。しかし現在の研究には、ほぼ影響がない。¹⁵

⁹ 高橋氏も同様なことを指摘しているが、氏が指摘するように、武士戯作者の黄表紙の背景には上位の武士と下位の武士との間の情報共有の問題とこれによる政策の伝達の問題があったと考えている。TAKAHASHI 1994: 102.

¹⁰ これを裏付けるために、落し噺が黄表紙の内容に直接影響を与えたことを指摘したい。『天下一面鏡梅鉢』（黄表紙、唐来参和作、寛政元年版）の8ウに「…かの落し咄にある通り」などがある。

¹¹ 「風刺」という用語の定義については、主に西洋で用いられる「satire」という概念に重なる部分があるが、江戸時代においては、西洋のような批判するための笑いとしてではなく、独自の価値観「通」に合わない社会的な現象を軽くあざ笑う「穿つ」、そしてそれは単に面白い「滑稽」というユーモアのセンスで解釈された。

¹² 黄表紙のあらゆる側面についての研究がある：INOUE 1986、TANAHASHI (2012 [1997])、SUZUKI (2015 [2011, 2010]) 等。その中で、寛政改革と黄表紙の関係性を最新の研究では SATŌ 2017 が統制で捉えている。確かに、出版統制の町触れが発令されたのも、文武奨励の訓令などの社会状況を背景に武士作者が引退し作品の内容が変化したのも、史実である。また例えば松平定信が自分の悪評を嫌い、個人的な意図で黄表紙をより厳しく取締まった、などという風説に基づく推察もある (IWASAKI 1983 を参照)。さらに寛政期の黄表紙に「強烈な風刺性」を求める研究も近年発表されている ZHEN 2014 を参照。研究会の以上の見解を総合的に分析して追究したのが筆者の博士論文である。NAKAZAWA-CSENDOM 2020. 松平定信の芸術や文学界に対する見解に関して新たな側面を追求した ISOZAKI 2012 を参照。

¹³ 読書記録とは、旧蔵者の手書きの書入れあるいは落書き（子供が書くような漢字によるもの）である。詳細に関して本論文の文献目録を参照。

¹⁴ 多くの中から、江戸時代の黄表紙評価に関して、読書記録以外は KYOKUTEI 1819、ASANO 1855 を参照。明治期の黄表紙評価に関しては MIYATAKE 1911 を参照。

¹⁵ 恋川春町の引退についての具体的な理由は確定しておらず、複数の説が存在している。一つの説としては、恋川春町の作品とされる春画本『遺精先生夢枕』に將軍を揶揄する内容があったことが問題視されたと推測している。（『浮世絵師伝』INOUE 1931）興味深い推測ではあるが、この春画本が恋川春町作であることが証明できないため、この説には留意する必要がある。『浮世絵年表』URUSHIYAMA 1934 では「春町の死因に就いては、十一代家斉將軍の内行を諷刺したる青本仕立の春画『遺精先生夢枕』を著し、為に禍を為して改易の悲運に至らんとせるを慨し、屠腹して死せりといふの説あり。もとより『鸚鵡返文武二道』

研究史を踏まえたうえでここで問われるのは、読者が黄表紙の本質をどのように理解していたかという論点である。また中野三敏氏の推測に基づいて、武士戯作者の引退については見直す必要がある。中野氏が定信を「戯作者の救いの神」と位置付け、戯作者は戯作に疲れ果てたため、改革の統制はありがたいものであったのではないかと推測している。¹⁶ 本稿は定信の意図までは問わないが、中野氏の推測を支持するような史料を提示することは可能であると考えられる。

黄表紙には風刺は含まれていないということを主張する理由として、西洋の風刺概念が主に政治を批判するものであるのに対し、以下に詳細に検討するように寛政改革関連の黄表紙は、そうした批判を目的としていないことが挙げられる。また政治に対する批判が危険視され、権力者に統制される傾向がある西洋の風刺概念とは異なり、黄表紙は商業的な側面が強く、庶民に向けて楽しめる読み物として広く普及していたことも挙げられよう。

さらに封建社会であっても、西欧と日本とではその支配階級の意識に相違があるため、同じ封建社会として解釈するのは間違いだと例えば中野氏も論じている。¹⁷ ただし、寛政改革の前の田沼時代は、資本経済やその政治動向の面ではヨーロッパの社会構造に近づいていたため、民衆の反応は幕府の在り方に対して「危険」と解釈されることもあった（たとえば天明の打ちこわしなど）。この観点から考えると、黄表紙はまず田沼派の失脚を取り上げ、穿つ点では自然と寛政改革を応援することになるが、以下に考察するようにその風潮は当時の江戸の世間話を反映していたというだけであり、また一時的なものでもある。「批判」や「応援」まして「風刺」として解釈することができない点が多い。

一 『鸚鵡返文武二道』と『よしの冊子』の比較分析

時代背景と黄表紙の関係を少しだけ整理すると、当代期の武士作者の黄表紙の内容を読むと、二つに区分できる。一つ目の区分は1788年（天明8年）である。この年に刊行された黄表紙は1787年（天明7年）年中に作成されたので、作品にはその年の情報が盛り込まれている。当時は松平定信が老中首座に任命され、田沼意次の石高削減や田沼派の処罰が始まり、寛政改革の文武奨励政策が導入された時期であった。しかし田沼派の役人がまだ多数残留しており、新政権の定信派との対立が起こっていた。簡潔に言えば、新政権の基礎が固められる時期である。ここで注目すべきなのは、黄表紙が新政権をどのように描写したかではない。注目すべきなのは人々がその時まで内面に潜めていた社会不満を解消できたことである。そしてその発信の手段こそがこの時期の黄表紙の役割であった。

天明後期の田沼時代を思い浮かべていただきたい。天災に飢饉、武士の借金、米価の高騰をきっかけに田沼派の間で強まる民衆の搾取が挙げられる。民衆の不満を想像してみよう。打ちこわしだけで済んだのは江戸的封建社会であるため、ほぼ同じ年の、フランス革命を契機に起きた、ヨーロッパ諸国の封建社会の解体目的で行われた革命とは対照的である。¹⁸ 春町のように武士戯作者である留守居役にとっては、自らの藩の経済状況にも大きくかかわる時期である。その中で田沼派が失脚し松平定信に大きな期待が寄せられたことは、定信宛ての「上書」ブームや、『よしの冊子』に集録された定信の才能を神のように拝める江戸の世間話からも伺える。

なんども自然禍の因を成せるが如し」という風に、自殺に関する風説の由来は様々である。但し、実録の倉橋家文書には「病死」としかないので、自殺を証明できないことも留意すべきである。後者に関しては、HAMADA 1959 を参照。

¹⁶ NAKANO 1992: 15–17.

¹⁷ NAKANO 2012: 85–90.

¹⁸ 当時の世界状況に関しては、江戸型の封建社会を西洋型の封建社会を区別される NAKANO 2012、また寛政改革に関して TAKEUCHI 2009 を参照。

もう一つの区分は1789年（寛政元年）だが、多少状況が変わり、黄表紙にも新しい時代に適応できない社会への揶揄的な側面が強まっていく。本稿では『鸚鵡返文武二道』を事例に取るが、武士戯作者と町人戯作者が執筆した全ての寛政改革関連の黄表紙を比較検討した結果、武士戯作は基本的には同じ傾向の作品であることを念頭においていただきたい。

【韓非子】の読者ブームの穿ち

朱子学を信奉する明代を代表とする法家韓非が著した『韓非子』という書物は、賞罰に関して論じ、君主は賞罰によって配下を支配していると説いている。『鸚鵡返文武二道』への『韓非子』の登場の意味に関しては、どの現代語解釈も「当時流行りの書物」として記載している。以下にもう少し詳細な解釈を提示していく。まずは『韓非子』に関して『よしの冊子』【資料①】を参考にしていきたい。

【資料①】一 近頃世上ニて書物読候もの多御座候所、韓非子杯相はやり会読等御座候由。原田清右衛門杯一向文字も読不レ申候て韓非子ノ会読をはじめ候よし。外も右様之馬鹿者彼是御座候よし。

（『よしの冊子』第八巻、五十二頁）

『よしの冊子』の著者、定信の側近であった水野為長は、『韓非子』のような難しい書物を解説しようとしているのが読み書きもできない代官であるということを軽蔑している。江戸時代の代官は旗本から任命され、主君の代理を務める重要な職だったにも関わらず、この時期には才能や能力で採用されていたのではないことが窺える。そしてそれは新政権からみても好ましい状況ではなかったことが分かる資料である。『韓非子』の読書ブームを『鸚鵡返文武二道』は【資料②】のように描写している。

【資料②】...このころまでは仮名付きの四書五経を読まれしものが、今では仮名書きの四書五経へ真字を付けて、さっゝと誦読する。
（師）経済には韓非子、呑むには剣菱のことだ。

（『鸚鵡返文武二道』、十三ウ）



【図①】『鸚鵡返文武二道』一ニウ・一三オ、国会図書館所蔵

この場面は勉強会である（図①右側を参照）。この場合「経済」は「経世済民」のことであり、

一般的には儒学の教えであるとされている。しかし寛政異学の禁が正当な学問として導入した朱子学の代表である法家の書物を推薦していることを考えると、当時『韓非子』が教科書とされていたことは理解しやすい。しかしここでは書物の内容が穿ちの対象ではない。最近まで仮名しか読めなかった幕臣たちが今になって漢字を書けるようになった。これはまさに為長が代官の知識不足を指摘した【資料①】と同じ意見なのである。『よしの冊子』は江戸中の話題を集めたいわば報告書であるが、当時定信やその側近以外に読んだ人は少ないであろう。当時大流行し安易に手に入った読み物である黄表紙において、同じ意見を提示するのは興味深い。まず作者が昨年話題に敏感であり、人々が興味を持った事柄を取り入れようとする意志をもっていることと、その話題の内容に同感する作法が窺える。そして読者の立場からしても、この年代官の知識不足には話題性があり、未だに江戸中の笑いの的である事例であったことが垣間見える。『よしの冊子』ではさらに、

【資料③】西下ニてハ韓非子を御用被レ成候と申候よし。

(『よしの冊子』第九巻、一一四頁)

定信(西下)やその配下が『韓非子』を読んだことは想像できるが、このような風説を流したことが書物問屋の広告の手段であったことも考えられる。なぜなら『鸚鵡返文武二道』には、【図①左側】で『秦吉了¹⁹の言葉』(定信作の『鸚鵡の言』の見立て)を購入しようとする人物の頭の上にも登場する流行していた書物の中に『幹非子』の看板も見えている。当時の本屋の雰囲気をよく表しているのであろう。すなわち当時の本屋では『韓非子』がヒットした書物であったが、その背景には代官の勉強熱心さがあった。田沼時代には本来なら職につけない知識不足の代官がエリートになったが、定信政権はその状況を改善しようと試験制度の導入を進めている最中である。そこで定信が『韓非子』だけを勉強手段として勧めていると勘違いした代官らが江戸っ子の穿ちの対象になったことが、このオチである。そしてこの状況を江戸っ子と同じように懸念していたのが、他にもない老中松平定信だったことが【資料①】から明確である。

「しゅうこうたん」が意味するのは周公旦、それとも周公丹?

現在出版されている『鸚鵡返文武二道』の翻刻・解釈では、原文でもともと平仮名で表記されている「しゅうこうたん」は、中国周王朝の政治家、儒教の理想的な人物の一人である「しゅうこうたん周公旦」の漢字に直されている。『鸚鵡返文武二道』の原文では、

【資料④】「菅公は有難い御人だ。近頃での賢人だ。しゅうこうたんというものだ。」

はんごん たん
「反魂、丹のことかえ。」

(『鸚鵡返文武二道』十二オ)

という会話である。

勿論その人物も含めて読まなければいけないのだが、反魂丹という中世から存在していた胃痛しゅうに効果のある医薬品が会話にでてくる以上、当時流行していた落書²⁰に登場する偽の医薬品の「しゅう周公丹」も読み解かれなければいけない。その落書は「夫子相伝／周公丹」というタイトルで、内容

¹⁹ しんきつりょう。九官鳥の別名。

²⁰ 本論文で多く引用するが、落書(らくしょ)とは時事や人物を揶揄する無名あるいは匿名の文書である。

が薬の宣伝に見立ててある。松平定信の家臣、服部半蔵政札が作成した長編随筆である『世々之姿』²¹に集録されている。松平定信の家臣が収録したということは、その周辺の武士もこういった落書を耳にしていたに違いないだろう。内容をまとめると、梅花（定信の家紋に見立てる）を第一とする薬であり、「白川の清水を以て調合されたという。効果は「上気たる品々の値段引下ヶ米油を前々のことく小知の者までよき食をすすめ世の乱気を去ル事神のことし」という。まさに田沼期の修正を行おうとする、白河藩の藩主であった定信の寛政改革を反映している。

「しゅうこうたん」の意味を江戸人の粋と野暮を対立させる世界観を以て解釈してみたい。このシーンは絵解きでもある。まずは挿絵を覗いてみよう。



【図②】『鸚鵡返文武二道』一ウ・一ニオ、国会図書館所蔵

挿絵【図②】には、講釈を聞かされている様々な身分の人物の会話が描かれている。即ち読者に会話の解釈が任されている。講釈では、菅公の著作である『秦吉了の言葉』（定信の随筆である『鸚鵡言』を暗示）が読まれている。菅公は分かりやすく定信を暗示し、人々からの老中に寄せた期待が窺える。ただその期待があまりに大きく、江戸っ子としては自然と穴を探したくなる。これはまさに黄表紙に求められた重要な要素「穿ち」である。要するに、『韓非子』の場面と同様にここでも定信の人物でもなく彼の政策でもない、人々の「行き過ぎた」解釈が「茶化される」。なお江戸っ子なら、この解釈は誰でもできたであろう。特に興味深いのは、揶揄の対象になっているのは定信の例えを鵜呑みにする旗本であるということである。この時期に黄表紙を執筆した作者のほとんどは藩士であり、その中でも平士²²に当たる。幕臣である旗本と藩士である戯作者たちの武士同士での対立が垣間見えてくる。またその対立を表現しようとする戯作者の姿勢も窺える。教養の高い武士戯作者にとっては、代官の苦勞している姿は非常に愉快なことであっただろう。

「宥坐」に隠された情報

同上の講釈の場面に「宥坐」という言葉が登場する。原文には、

【資料⑤】「異端の説法に申す〈宥坐〉ということで菅公御作『秦吉了』を読みましょう」
（『鸚鵡返文武二道』一ウ）

²¹ HATTORI 1788.

²² ただし晩年春町は年寄りに任命され、他にも以後上進したケースは見受けられる。

とある。菅公は定信を暗示しているので、「儒学では宥坐 ≪＝節度を保ち、無理はしない≫ というので定信作の『鸚鵡言』を読みましょう」という意味に捉えられる。当時でいう「身分相応な振る舞い」のことだろう。宥坐の意味は分かったものの、なぜそれがこの場面に登場するのかに関してさらに分析が必要である。

宥坐の概要を理解するのに、宥坐の器という器を稽古に用いることがある。『中庸』にある宥坐の器の説明によれば、壺状の器に水が入っておらず、空の時は傾き、修行者が水を入れていく中でちょうど良い時はまっすぐに立ち、水をいっぱいに入れるとひっくり返ってこぼれてしまう。孔子は宥坐の器を常に真っ直ぐに立たせることに慢心や無理を例えた。

湯島聖堂（在東京都文京区）の史跡に行ってみると、なんと黄表紙の挿絵【図②】と同じ場所にたどり着く。今も宥坐の器が設置されている。調べてみると湯島聖堂に宥坐の器が寄付されたのは1774年（安永4年）のことであり、寄付した人物は寛政改革時に松平定信によって老中職へ推薦された老中松平信明だった。寛政改革の一つの政策であった朱子学の勧めや湯島聖堂を学問所に推薦することを、後世は定信の意図として評価しているが、実際には定信の独断ではなく、そこに松平信明が関わっていたことも十分に考えられる。そしてこのことから確かなのは、『鸚鵡返文武二道』が書かれた当時の湯島聖堂には「宥坐之器」²³があったことである。さらに黄表紙にも取り上げられるくらい、当時は人気の物であっただろうと思われる。その器の人気、即ち修行の意図を勘違いする人たちこそが、この場面の笑いのオチである。

二 鳳凰モチーフから武士戯作者の引退の予言まで

『鸚鵡返文武二道』の結末は春町の個人的な政治評価であったということが通説の見解である。即ち麒麟と鳳凰の登場を孔子との関連で紹介することが真の君主が現れないということを暗示している、という通説である。無論そういう解釈もできるかもしれない。さらに麒麟と鳳凰は江戸時代に読まれた他の説話などにも登場し、様々な他の解釈も可能である。ただ黄表紙としては、この伝説の生き物を登場させるのに当時の出来事との関連性がないと意味がない。以下に紹介する『よしの冊子』の記述と比較すると、このオチは春町の個人的な意見ではなく、当時の「麒麟」「鳳凰」関連の話題を黄表紙らしく再解釈した上で高度な戯作に作りたてていたことが窺える。そして穿ちの対象が定信ではないことも明確である。まず『鸚鵡返文武二道』の最終頁には鳳凰の来訪があり、聖代が訪れたということから始まり、続きでは麒麟も登場する。

【資料⑥】麒麟も出けれども、これは栗鼠同様に隅っこに置いて見せける。

（『鸚鵡返文武二道』十五ウ）

麒麟は当時の文脈では例えば【資料⑦】のような意味合いも含んでいた。

【資料⑦】【おとし咄】一戸田因幡守殿の庭へ麒麟が出たから、家中用人其外寄合、麒麟の側へ行、是ハ麒麟殿、御名ハ聞たが御目ニかゝるハ初めて、扱承れば、越中様の御庭ニ御住被レ成と申がいよいよ左様でござる歟。今日ハ是へどふして御出被レ成だ。殿の御参府前何でも恐悦サアサア御馳走ヲ申付ませう。麒麟へいへい御馳走を受ますと西下へ帰られませぬから、夫ハ受ました同様ニ有がたふござります。家老用人時ニ麒麟殿貴様の脇の下からハ火炎が出ると申が一向御見え被レ成ぬ、どう致した事でござる。いへさ、此方へ参りましたら冷汁が出ます。

（『よしの冊子』第九巻、七十頁）

²³ NIHON KYŌIKUSHI SHIRYŌ (7) 1904: 361. 湯島聖堂の宥坐之器の絵と解説がある。

ここに挙げられる戸田忠寛（1739–1801）は肥前島原藩の二代藩主であり、田沼時代に出世し京都所司代を務めていたが1787年（天明7年）末に引退した。この経歴を考慮すると【資料⑦】の落とし噺の解釈は次の通りであろう。定信²⁴の麒麟が、戸田が国許から江戸へ出府する前に戸田の屋敷へ行った。その際、麒麟をもてなしたい戸田に対し麒麟はご馳走（賄賂）を断る。その理由は定信のところに戻れないからである。

田沼時代に出世した人間が定信の時代でどのような扱いを受けたかや、新政権でその人物の居場所がなくなったことを想像して笑っている、江戸っ子の遊びが想像できよう。春町が【資料⑥】で麒麟を隅っこに置くことには、以上のような背景がある。解釈すると、定信政権下では麒麟の落とし噺のように厳しく扱ったこともあるかもしれないが、この作品の主旨を伝えているのは麒麟ではなく鳳凰だと窺える。つまりこの黄表紙は定信政権を批判するものではなく別の意図を伝えるものなのである。

さてここでは主役が鳳凰であることを明確にしたが、鳳凰モチーフの意味について探ってみよう。寛政改革関連の四点の黄表紙にも表れる「鳳凰」モチーフの解釈は、当時流行していた鳳凰の茶屋と関連付けられていることが多い。『鸚鵡返文武二道』以外に以下の3点もある。『太平記 吾妻鏡／玉磨青砥銭』²⁵（1790年、寛政2年版）のオチが特に興味深いので、ここで引用する。

【資料⑧】東西々。これより口上を申し上げます。昔、聖代の時には、麒麟や鳳凰が現れましたが、このたびは蝙蝠が現れまして、芸当をいたします。悪しきところは鳥なき里の蝙蝠と、燕に似たものゆへ、柳に御一覽下されませふ。

（『太平記 吾妻鏡／玉磨青砥銭』一五ウ）

即ち聖代が訪れたものの野暮な蝙蝠＝ぶっさき羽織を着用している武士も現れ、彼らよりましな人物がいなかったため結局は指導者になれる、ということを出京伝（1761–1816）が穿っている。町人戯作の中でも京伝だけは武士戯作者に近いテーマも取り入れていた。次に鳳凰が現れるのは『其返報豊年の貢』（1790年、寛政2年版）だが描写は明らかに昨年の『鸚鵡返文武二道』の影響をみせている。最後に唐来参和の『天下一面鏡梅鉢』（1789年、寛政元年版）もあるが、鳳凰場面は作品の内容とあまり連携せず重要ではない。



【図③】『鸚鵡返文武二道』一五ウ、国会図書館所蔵

²⁴ 「越中」と「西下」も松平定信を指す言葉である。

²⁵ この黄表紙を英語に翻訳したものの中で、DEBOUCK 2018 の論文が評価に値する。通説に基づいた内容ではあるものの、『玉磨青砥銭』が政治に対して必ずしも風刺的でないことも指摘している。

『鸚鵡返文武二道』の以上の鳳凰場面の挿絵【図③】を観察すると、無論当時流行していた鳳凰の茶屋を連想する必要はあるがそれだけでは作品全体との関連性が薄い。『鸚鵡返文武二道』で現れる鳳凰は最終頁とその前の頁の二か所（十四ウ～十五ウ）に登場する。まず菅公（定信）の例えを勘違いし鳶を揚げていた武士の場面が描写されている。鳳凰がその鳶を友達と思い違いして来訪し聖代になったという。そして最終頁ではこの鳳凰が自らを皆に見せるために鳳凰の茶屋に定住するという筋である。その茶屋では【資料⑥】で紹介した麒麟も展示される。鳳凰に関して『よしの冊子』では次の落とし噺が見受けられる。

【資料⑨】【おとし咄】一 越中様御前へ公用人罷出、此間中御書院の御庭へ鳳凰が参ますから、桐の実などを才覚いたし馳走いたしますが、とかく御退出時分ニ成ますと飛去ます申上れば、それハめずらしい事だ、どふぞ明日ハ逢たい物だから、夕方迄留て置様ニ致せ、かしこまりました。鳳凰殿今日も能御出、扱主人御目ニかゝりたいと申されますから、今日は是非々々夕方迄お待なさい。鳳凰夫ハ有がたふござりますが、私は御前へハ出られませぬ。用ハなぜでござる。鳳凰どふもなりがりつば過ぎます。

（『よしの冊子』第九巻、八三頁）

鳳凰が定信の前に姿を現さないオチは面白いものの、風刺的な意味はそれほど感じられない。他にも類似している記述があり、無論このような落とし噺も春町のネタになっただろうが、内容がどれも違いすぎて関連付けがたい。『鸚鵡返文武二道』の鳳凰の来訪シーンは【資料⑩】のように書かれている。

【資料⑩】聖人の親玉孔夫子、「鳳凰至らず、河図を出さず」と宣いしに、今度鳳凰出しは、まことに聖代の奇瑞な〔り〕…【図③】

これはもともと『論語』に登場する「鳳凰も現れず聖代ではないからもう終わりだ」という内容に当たる。しかしここでは鳳凰が現れたので、黄表紙の典型的なめでたい結末へ一歩近づいていく。

²⁶ 続いて作品の終結とオチを原文でみると、

【資料⑪】【図③】

（男①）「このあんどんは、はま丁の先生かの」

（男②）「イヤ、石山人だ」

これは何のことだろうか。神沢杜口の『翁草』から解釈していきたい。『翁草』には、1788年（天明8年）ごろの記述²⁷に「江戸の三幅対」という落書がある。落書の一部を取り上げてみると、

【資料⑫】横倒して威勢有もの

東江先生 越中守 団十郎

当時の影響力あるものとして、沢田東江（1732-1796）、松平定信、歌舞伎役者の市川團十郎（1741-1806）の三人が挙げられるのも興味深いだが、その解釈もここで省略し、以下を見ていくと、

²⁶ 本論文には直接関係しないが、鳳凰のモチーフは当時の戯作者にとって人気のテーマだったようである。『論語』の注釈書である『論語徴』にあるのも驚きではない。しかし後者の内容を踏まえた安永年間の太田南畝作『論語町』（徂徠の『論語徴』の解釈を吉原に投影したもの）にも登場するのは興味深い。

²⁷ 一四〇巻目、「翁草」巻之一三三～巻之一六六。KANZAWA 1776-1791.

【資料⑬】 隙のあいたもの

ころび芸者 栄川院 権門役人

ころび芸者は当時の芸者の振る舞い（買春行為）を指摘している。田沼政治を揶揄した狂歌に「世にあふは道楽者におごりものころび芸者に山師運上」という一節がある。寛政改革によって江戸の岡場所の取り締まりが強化され芸者が暇になったことを揶揄し、ここで筆頭に挙げている。また田沼時代の権門役人に関して「隙があいた」といつていることは言うまでもない。さらに【資料①】から【資料③】までに紹介した当時の文脈は論証の裏付けにもなる。



【図④】 狩野典信画『麒麟・鳳凰図』、白鶴美術館所蔵

栄川院は絵師の狩野典信（1730－1790）のことであり、『鸚鵡返文武二道』のオチの解釈にも手がかりを差し伸べる。すでに『鸚鵡返文武二道』の最終頁の鳳凰と麒麟場面とその一部の解釈を紹介した。同じ場面に【図③】の挿絵と最後に【資料⑪】に挙げた会話がある。【資料⑪】にみる浜町（原文では「はま丁」）の先生は、現在出版されている翻刻・解釈では戯作者の沢田東江の通称となっている。つまり東江には「りん」という名もあり、それを挿絵の「きりん」と重ねるという解釈である。東江は【資料⑫】「横倒して威勢有もの」の一人として挙げられていることからその解釈にも一理がある。ところで、【資料⑬】「隙のあいたもの」の一人を見ると、挿絵の麒麟・鳳凰図を描いた絵師を暗示しているという解釈も可能である。なぜなら狩野典信の絵画には「麒麟・鳳凰図」【図④】という軸物がある。また典信は二歳の時に浜町狩野家出身の受川玄信（1715－1731）²⁸の養子に迎えられた。典信が家督を継ぐのは木挽町であるが、養父の家系を考えると浜町の先生として捉えることもできなくはない。そして典信は定信の教師でもあり、田沼意次のお気に入り絵師でもあった。²⁹ この意味合いで『鸚鵡返文武二道』のオチを解釈すると【図③】を典信（旧政権で活躍していた有名な絵師）ではなく石山人（生没年不詳、白山御殿町の藩士井孫十郎、江戸中期の戯作者）が描いたことになる。石山人は春町同様の藩士、戯作者、絵師であったが、改革が始まると同時に戯作から引退し、幕府に採用され、依頼を受けて絵を描いたこともあった。石山人を登場させるのは春町だけではなく、朋誠堂喜三二（1735－1813）も『文武二道万石通』（天明8年、1788年、黄表紙）に幕府の依頼を受けた絵師として登場させる。筆者の博士論文で行った当該期の黄表紙の比較検討では、石山人の描写はどの場面でも中立的で批判的には読めないことを明らかにした。揶揄の対象でなければ、武士作者の引退を取り上げるこの意味は何だったのだろうか。石山人同様に藩士であった春町、喜三二が、自らの引退の意図とその後の行先を暗示

²⁸ 狩野派浜町家二代甫信の長男ながら、狩野派木挽町家四代古信（典信の実父）の養子として同家五代目を踏襲した。

²⁹ TOKUSHIMA SHIRITSU (ed.) 2013: 4-5.

していたと考えられなくもない。

以上を踏まえると、武士黄表紙作者の引退背景には戯作界の変化の流れがあったと考えられる。中村幸彦氏が論じるように、武士が戯作を書き始めたのは自分が置かれた固定した社会階級で自己実現ができない不満を解消するためであった。³⁰ また石川了氏が指摘するように、1784年（天明4年）に主に武士が著した狂歌が大流行したが、その後武士たちはすぐに狂歌に飽き、一方で町人の間では絶えず流行し続けたため、書き続けるしかない状況が生まれていた。³¹ 鈴木俊幸氏が、集会に集まった人々が狂歌を詠むことよりも集まること自体を楽しんでいた、と指摘し、狂歌という文芸の魅力がやや薄れた、と述べている。³²

寛政改革の始まりにより、出世構造が変化し自己の努力や知識により社会進出が可能となったことから武士戯作者の不満は解消されたと考えられる。従来の見解では黄表紙の武士作者が藩主の命令で筆をおいたとされているが、実際にはその具体的な証拠はない。それに対して1790年（寛政2年）に最初の潤筆料が導入され³³、町人戯作者たちが本業として戯作界に参加し新たな文学を発信し始めたことは、改革の有無を問わずに起こったことである。つまり当時の状況を考えると、武士戯作者たちは改革やその主導者の統制よりも、時代の流れに乗り1788年（天明8年）と1789年（寛政元年）を境にして傑作を残し、戯作界を去る決意をした可能性があることが分かる。背景として、戯作界の流れが変わり少しずつ黄表紙から合巻など新たな文学が生まれたことも挙げられる。またこの説を裏付ける一例として武士戯作者の中から大田南畝（1749–1823）が支配勘定に任命され、また喜三二が佐竹藩で活躍して出世するなどの成功例もあった。

まとめ

本稿では、黄表紙の本文や当時の資料を分析し、寛政改革期の黄表紙が扱う題材の本質を考える上での手がかりが豊富にあることを明らかにした。特に『鸚鵡返文武二道』を例に挙げ、寛政改革関連の黄表紙には新たな側面があることを指摘した。また当該期の黄表紙には政治的な批判の目的はなく、作者の引退の理由も強制とは別のところに求められることを述べた。黄表紙は当時の出来事や流行を詳細に描写しているが、当時の読者からすればそれらはその年の一過性のものであり、世の流れを描いたものであった。また改革期の黄表紙の内容と一致する話題は、文学である黄表紙とは異なる性質を持つ『よしの冊子』や他の史料にも取り上げられていることも多く、黄表紙が江戸時代後期の社会の空気をよく描写していることが確認できた。従来の研究では黄表紙は文学研究や歴史的研究の対象となっており、その衰退の理由や権力者の行動などが注目されてきた。しかし本研究では、通説の再考もしながら、読者の社会観や作者が置かれた社会的な状況に着目し、黄表紙を史料として扱う価値があるものと考えている。

³⁰ NAKAMURA 1982: 84–85.

³¹ ISHIKAWA 2011: 24.

³² SUZUKI 1989: 161.

³³ ASAI (ed.) 2015: 85.

付録兼文献目録

本研究で参照した文献や資料に加えて『鸚鵡返文武二道』についての追加情報を以下に記載する。

一次資料

1. 黄表紙の現代の活字版

HAMADA, Giichirō 浜田義一郎 (ed.) (1985): *Nihon koten bungaku zenshū*, vol. 46 *Kibyōshi, senryū, kyōka* 日本古典文学全集 46 黄表紙、川柳、狂歌. Tōkyō: Shōgakkan.

KOIKE, Masatane 小池正 (ed.) (1982): *Edo no gesaku ehon*, vol. 3 *Henkakuki no kibyōshishū* 江戸の戯作絵本 3 変革期の黄表紙集. Tōkyō: Shakai shisōsha.

MUKASA, San 武笠三 (ed.) (1935): *Kibyōshi jisshu* 黄表紙十種. Tōkyō: Yūhōdō.

TANAHASHI, Masahiro 棚橋正博 (ed.) (1999): *Shinpen Nihon koten bungaku zenshū*, vol. 79 *Kibyōshi, senryū, kyōka* 新編日本古典文学全集 79 黄表紙、川柳、狂歌. Tōkyō: Shōgakkan.

2. 黄表紙の原本とあらすじ

管見の限りでは『鸚鵡返文武二道』は国会図書館、東洋岩崎文庫、東京都立博物館、京都大学附属図書館、東京都立中央図書館(日比谷加賀、日比谷東京)、たばこと塩の博物館、東京大学附属図書館、東北大学狩野文庫に版本がある。棚橋正博『黄表紙総覧』が版本の相違(正版と異版の二種類)について詳細に論述し、膨大な資料を通してその時点でアクセス可能な版本を分析している。

棚橋正博氏が『黄表紙総覧』で触れられていない事柄に関してのみここで追究する。京都大学附属図書館所蔵、整理番号「四一四三ーサー二」の版本の題箋に「滑稽」の書入れがある。即ち旧所蔵者にとっては滑稽という解釈もあったことが窺える。ただこの定義がいつの時代で書かれたのかは定かではない。蔵書目録や整理目的が考えられる。同じく京都大学附属図書館所蔵、整理番号「四三ーサー一ー一〇」の『文武二道万石通』の(保護用の)袋に「滑稽」の記載がある。表紙に値段と推測される「拾文」も書いてあることから、表紙は江戸時代の書き入れだと推測される。東京都立博物館所蔵、整理番号「〇三〇一と七五三九」の版本には「徳川宗敬氏寄贈」「昭和三十九年七月十一日」の書入れがある。徳川宗敬(生没年、1897-1989)は養父達道が収集した江戸時代の写本・版本約五万冊を1943年に東京国立博物館に寄贈した。養父達道は一橋徳川家第11代当主であったことから、一橋家に黄表紙があったことが分かる。東京都立博物館と東京大学附属図書館の版本にも福田文庫(福田敬園の蔵書)の印があるので、もともと同じ蔵書であったことがわかる。

『鸚鵡返文武二道』のあらすじ

「表層を読む読者」の理解

延喜の御代に藤原時平の代わりに若い天皇の補佐に任命された菅秀才が武芸を奨励するが、人々が武勇を誇って洛中で騒動を繰り広げる。そこで大江匡房を招いて自著の『九官鳥の言葉』を民衆に講釈で聞かせ、聖賢の道を講じさせるが、講釈や武芸の奨励の内容を勘違いした人々が再び洛中で騒動を引き起こす。最終的には鳳凰が現れ、黄表紙らしい目出度い結末である。

「訳知りの読者」の理解

上記の平安時代の場面は、実は表層的なものに過ぎない。作者の真の目的や作者としての腕前の見せどころは、この表層にどのように当時の出来事を隠すかにあったのである。そこで天明後期や寛政初期の時代背景に合わせて内容を読み直すと、以下のように解釈できる。

延喜帝すなわち醍醐天皇（徳川家斉）の新政権下において、藤原時平（老中田沼意次）の後任として若い天皇の補佐官として任命された菅秀才（松平定信）は、寛政改革において文武奨励令を発令し武芸の奨励を行っていた。しかし文武両道の教えを勘違いした臣下（旗本）たちが武勇を誇示し、京都（江戸）で騒動を引き起こす。そこで菅秀才は大江匡房（柴野栗山）を招き、自著である『九官鳥の言葉』（松平定信の著書『鸚鵡言』のことであろう）を民衆に講釈で聞かせ、聖賢の道を説いた。しかし講釈や武芸の奨励の内容を勘違いした人々は、再び江戸でさらに間違った行動を繰り返してしまう。最終的には鳳凰が現れるが、本文で解説したように鳳凰もまた勘違いを引き起こす結果となる。

3. 江戸時代から昭和期までの黄表紙評価

ASANO, Baidō 浅野梅堂 (1855): “Kankei satetsu 寒繫瓊綴”. In: MORI, Senzō, KITAGAWA, Hirokuni 森銚三、北川博邦 (eds.) (1979): *Zoku Nihon zuihitsu taisei* 続日本随筆大成, vol. 3. Tōkyō: Yoshikawa kōbunkan: 19-24.

HATTORI, Hanzō Masafuda 服部半蔵政礼 (1788): *Yoyo no sugata* 世々之姿. Tenri University Library, manuscript, vol. 34.

INOUE, Kazuo 井上和雄 (1931): *Ukiyo-eshi den* 浮世絵師伝. Tōkyō: Watanabe hangaten.

KANZAWA, Tokō 神沢杜口 (1776–1791): *Nihon zuihitsu taisei* vol. 3 (23): *Okinagusa* 日本随筆大成 3 (23) 翁草 (1978). Tōkyō: Yoshikawa kōbunkan.

KYOKUTEI, Bakin 曲亭馬琴 (1819): “Iwademo no ki 伊波伝毛乃記”. In: TOKUDA, Takeshi 徳田武 (ed.) (2014): *Kinsei mono no hon Edo sakusha burui* 近世物之本江戸作者部類. Tōkyō: Iwanami bunko: 281-357.

MIYATAKE, Gaikotsu 宮武外骨 (1911): *Hikkashi* 筆禍史. Ōsaka: Gazoku bunko.

MORI, Senzō 森銚三 (ed.) (1981): *Zuihitsu hyakkaen*, vol. 8-9: Mizuno Tamenaga 水野為長: *Yoshi no sōshi* 随筆百花苑 8-9 よしの冊子. Tōkyō: Chūō kōronsha.

SEGAWA, Tomisaburō 瀬川富三郎 (ed.) (1818): *Shoka jinmei: Edo hōgaku wake* 諸家人名／江戸方角分. Manuscript, NDL digital collections.

URUSHIYAMA, Matashirō 漆山又四郎 (1934): *Shinsen ukiyo-e nenpyō* 【新撰】浮世絵年表. Tōkyō: Keikō shoin.

二次資料

ASAI, Kiyoshi 浅井清, ICHIKO, Natsuo 市古夏生 et al. (eds.) (2015): *Sakka no genkōryō* 作家の原稿料. Tōkyō: Yagi shoten.

CSENDOM, Andrea (2021): *Kinkin szenszei álmától a jó és rossz lelkek küzdelméig: Három edői kibjónsi a XVIII. század végi Japánból*. Budapest: Ráció Press. (金々先生の夢から善玉と悪玉の喧嘩まで—江戸中期の3編の黄表紙のハンガリー語訳).

DEBOUCK, Pieterjan (2018): *Satire within kibyōshi in eighteenth-century Edo: a translation and analysis of Santō Kyōden's “Tama Migaku Aoto ga Zeni”*, Doctoral dissertation, Ghent University. <https://libstore.ugent.be/fulltxt/RUG01/002/478/969/RUG01->

- 002478969_2018_0001_AC.pdf, accessed 06.01.2023)
- HAMADA, Giichirō 浜田義一郎 (1959): “Koikawa Harumachi: Kurahashi-ke monjo oyobi ni san no kōsatsu 恋川春町: 倉橋家文書および二三の考察”. In: *Kokugo to kokubungaku* 国語と国文学 36/8 (425). Tōkyō: Meiji shoin: 1–11.
- HASHIMOTO, Saho 橋本佐保 (2010): “Yoshi no sōshi ni okeru Kansei kaikaku no kōsatsu 「よしの冊子」における寛政改革の考察”. In: *Shien* 史苑 70 (2). Tōkyō: NDL: 133–172.
- INOUE, Takaaki 井上隆明 (1986): *Edo gesaku no kenkyū: Kibyōshi wo shu to shite* 江戸劇作の研究—黄表紙を主として. Tōkyō: Shintensha.
- ISHIKAWA, Ryō 石川了 (2011): *Edo kyōkadan-shi no kenkyū* 江戸狂歌壇史の研究. Tōkyō: Kyūko shoin.
- ISOZAKI, Yasuhiko 磯崎康彦 (2012): *Matsudaira Sadanobu no shōgai to geijutsu* 松平定信の生涯と芸術. Tōkyō: Yumani shobō.
- IWASAKI, Haruko (1983): “Portrait of a Daimyo: Comical Fiction by Matsudaira Sadanobu”. In: *Monumenta Nipponica* 38, no. 1 (1983): 1–19.
- KERN, Adam L. (2006): *Manga from the Floating World. Comicbook Culture and the Kibyōshi of Edo Japan*. Cambridge: Harvard University Press.
- MONBUSHŌ 文部省 (ed.) (1904): *Nihon kyōikushi shiryō* 日本教育史資料 vol. 7. Tōkyō: Fuzanbō.
- NAKAMURA, Yukihiko 中村幸彦 (1982): “Gesakuron 戯作論”. In: *Nakamura Yukihiko chojutsushū*, 中村幸彦著述集, vol. 8. Tōkyō: Chūō kōronsha: 74–85.
- NAKANO, Mitsutoshi 中野三敏 (1992): *Edo bunka hyōbanki: Ga-zoku yūwa no sekai* 江戸文化評判記 — 雅俗融和の世界. Tōkyō: Chūō kōronsha.
- NAKANO, Mitsutoshi 中野三敏 (2012): *Edo bunka no saikō: Kore kara no kindai wo tsukuru tame ni* 江戸文化の再考 — これからの近代を作るために. Tōkyō: Kasama shoin.
- NAKAZAWA-CSENDOM, Andrea (2020): *A Kansei-kori kibyōshi eszmetörténeti elhelyezése és fordítási lehetőségeinek vizsgálat: Forráselemzés a kutatástörténet kiegészítéséhez*. Doctoral dissertation, Eötvös Loránd University Doctoral School of Linguistics, Budapest. (寛政期の黄表紙の思想史的な位置付けの分析とその翻訳方法論の検討 — 研究史の追究への史料分析、博士論文).
- SATŌ, Yukiko 佐藤至子 (2017): *Edo no shuppan tōsei: Dan'atsu ni honrō saretā gesakushatachi* 江戸の出版統制—弾圧に翻弄された戯作者たち. Tōkyō: Yoshikawa kōbunkan.
- SHIRANE, Haruo (ed.) (2002): *Early modern Japanese Literature: An Anthology, 1600-1900*. New York: Columbia University Press.
- SUZUKI, Toshiyuki 鈴木俊幸 (ed.) (1989): *Tōrai Sanna* 唐来三和. *Shirīzu Edo gesaku* シリーズ江戸戯作. Tōkyō: Ōfūsha.
- SUZUKI, Toshiyuki 鈴木俊幸 (2010): *Ezōshiya: Edo no ukiyo-e shoppu* 絵草紙屋—江戸の浮世絵ショップ. Tōkyō: Heibonsha shinsho.
- SUZUKI, Toshiyuki 鈴木俊幸 (2011): *Edo no honzokushi: Kibyōshi de yomu Edo no shuppan jijō* 江戸の本づくし — 黄表紙で読む江戸の出版事情. Tōkyō: Heibonsha shinsho.
- SUZUKI, Toshiyuki 鈴木俊幸 (2015): “Kusazōshi ron 草双紙論”. In: *Shoseki no uchū: Hirogari to taikai* 書籍の宇宙—広がりとは体系. Tōkyō: Heibonsha: 267–305.
- TAKAHASHI, Akinori 高橋章則 (1994): “Kansei igaku no kin saikō 寛政異学の禁再考”. In: *Nihon shisōshigaku* 日本思想史学 (26). Sendai: Nihon shisōshi gakkai: 100–112.
- TAKEUCHI, Makoto 竹内誠 (2009): *Kansei kaikaku no kenkyū* 寛政改革の研究. Tōkyō: Yoshikawa kōbunkan.
- TANAHASHI, Masahiro 棚橋正博 [1989 (1986)]: *Kibyōshi sōran* 3 vols. 黄表紙総覧 全三巻.

Musashi murayama: Seishōdō.

TANAHASHI, Masahiro 棚橋正博 (1997): *Kibyōshi no kenkyū* 黄表紙の研究. Tōkyō: Wakakusa shobō.

TANAHASHI, Masahiro 棚橋正博 (2012): *Santō Kyōden no kibyōshi wo yomu: Edo no keizai to shakai fūzoku* 山東京伝の黄表紙を読む—江戸の経済と社会風俗. Tōkyō: Perikansha.

TOKUSHIMA SHIRITSU TOKUSHIMA-JŌ HAKUBTSUKAN 徳島市立徳島城博物館 (ed.) (2013): “*Kano Eisen’in to Tokushima-han no gajintachi* 狩野栄川院と徳島藩の画人たち”. Tokushima.

ZHEN, Zi Yi Zhuan 陣子逸撰 (2014): *Kibyōshi ni okeru warai: Koikawa Harumachi no sakuhin wo chūshin ni* 黄表紙における笑い—恋川春町の作品を中心に. Master’s thesis, Soochow University 東吳大学. (101SCU00079002-001.pdf, accessed 06.01.2023).